

## まえがき —本書のパースペクティブ—

そもそも、本書は2006年に発行された『リハビリテーションのための認知神経科学入門（協同医書出版社）』の改訂版を想定していた。そのつもりで原稿を書き始めたが、結果として、新たにすべてを書き下ろすことになった。よって、タイトルも改め、新刊として世に出すことにした。すべて新しい原稿となった理由としては、14年のこの分野における科学の進歩や変化が影響しているのは言うまでもない。

さて、本書は2部構成になっている。第1部は高次脳機能に関連する基礎的知見をまとめたものになる。そして、第2部がリハビリテーション医療の対象となる高次脳機能障害に関する基礎的かつ臨床的な知見をまとめたものである。

第1部は「注意とワーキングメモリ」「知覚とキネステーズ」「言語とコミュニケーション」「自己意識とディジションメイキング」の4章で構成されている。これらの機能は、地球上の生物の中でも人間で特に発達を遂げた「高次脳機能」であり、言い換えれば、人間らしさを表す象徴そのものであると言えよう。ゆえに、これらの機能が脳損傷によって失われてしまうということは、人間らしさを奪われてしまうといった「ころ」「意識」を生みだしてしまうのではないだろうか。リハビリテーションプロセスが全人間的復権のプロセスというのであれば、これらの機能に関するそれ相応の知識をもって対象者に臨みたいところである。

第2部は3章で構成され、「半側空間無視」「身体・病態失認」「失行」を取り上げた。これらの症状は、リハビリテーション医療において、巢症状としてポピュラーな高次脳機能障害である。そして、これら症状の出現はADLなどの予後に関わる。現に、リハビリテーション専門職はカンファレンスなどで「この方は注意障害を合併していて…」とADL自立に至らなかった要因として、これらの症状をその理由にすることが多い。これらの症状に対して専門職として挑むためには、それ相応の知識を持たなければならないことは言うまでもないが、現状、十分な教育がされているとも言いがたい。技術があっても知識がなければ病態を捉えることはできない。知識は羅針盤のようなもので、知識を持つことで「見えないものが見えるように」なるのである。特に、高次脳機能障害は筋萎縮や運動麻痺のように目に見えないことが多く、対象者からの訴えは闇の中に葬られることもしばしばある。そうした訴えを理解し、病態を把握するためにも、専門職は知識を常に更新し続ける必要がある。

## まえがき

さて、『リハビリテーションのための認知神経科学入門』を執筆・出版した14年前は、何から何まで一人で実験したり、研究したり、執筆したりしていた。その時と比べ、今は多くの仲間・人材に恵まれることになった。私が主宰する研究室にも有能な人材が集まり、この分野の基礎・臨床研究を今なお発展させている。本書内にも研究室で明らかにしてきた知見を随所に織り交ぜることができた。そういう意味で、本書はこれまで私が作ってきた本とは一線を画すのかもしれない。いずれにしても、本書から得られた知識によって、これまででは見えなかったものが見えるようになり、それによって、対象者の病態を把握し、その病態に基づいて臨床意思決定が導かれていくことを祈念したい。

## あとがき

「まえがき」で述べたように、本書は『リハビリテーションのための認知神経科学入門（協同医書出版社、2004）』を改訂する目的で執筆を開始した。しかし、結果として、すべてを書き下ろし、新著として世に出すことになった。そして『リハビリテーションのための認知神経科学入門』はその任を終え、むしろミスリードになる可能性もあると判断し、絶版とすることにした。そういう意味で、この14年は世界的にも個人的にも変化に富んだ年月だったのかもしれない。

世界的には、認知神経科学領域の発展に伴い、人間が持つ高次脳機能に関する科学的エビデンスが蓄積されてきた。14年前を振り返ると、脳イメージング研究がある意味ブームとなり、測定機器依存に研究が遂行・進行した。しかし、そこでは実験室内の脳機能だけが注目され、行動、身体、他者、二者間、社会など、本来、人間の脳が持つ意味である「ダイナミクス」が抜け落ちていたように思える。加えて、脳を測定するだけで「新しいこと・もの」とフューチャーされる時代背景があったように思える。

時は流れ、三人称的脳科学から二人称的脳科学へと進歩するとともに、行動を分析すること、そして、リアルな環境での調査の重要性が再認識され、それらを融合することで、真のエビデンスに近づけようと研究が進んでいる。一方で、脳イメージング研究に依存せず、神経障害の病態を行動の観点から探索しようと、本来あるべき臨床研究の態度が復興されつつある。

神経学の父と称されるシャルコーは、膨大な数の患者診察と病理解剖を通じて、病態を整理・分類・命名してきた。彼の臨床講義は火曜講義と呼ばれ、そこには実際の患者が来て、模範的な問診、診察を、彼自身が学生の前で行い、診断の組み立て方、ほかの疾患との違いや、それに応じた治療法を解説する臨床講義が展開された。行動を見て学ぶという医学の本質に触れる意味でも、このプロセスはあらためて最重要であるという想いが出現するとともに、今なお、色褪せない王道の手段であると思うわけである。シャルコーに学んだパバンスキーは、「片麻痺患者は健側に重みをかけ、麻痺肢で半円を描き、鎌で草を刈るように歩く」と記述した。そして、現象を発見し、それを記述することの重要性を説いた。時代は変遷し、今だからこそ、彼らの態度・行動を模範とすべきであると思う。

高次脳機能障害を有する患者は実に不思議なことを表現・記述するが、その内観や現れる行動こそが、真のエビデンスであり、専門職はその出来事に対して常に興味をもって見続けることが求められる。その見続けるといった態度は、ある程度の知識をもつことによって維持されていくようにも思える。だからこそ、学び続け、知識を更新し続けなければならない。パバンスキーは次のような言葉も残している。「我々は認めなければならない、病態失認は現実な

## あとがき

のか？私は答えることができない」と。この言葉を、畏れながら次のように勝手に引き継がせていただきたい。「我々は歴史を引き継がなければならない。我々は難しい問題を解くために学び続けなければならない。そして研究し続けなければならない」と。こうしたプロセスを通じて、リハビリテーションプロセスにおける「阻害因子と表現されてしまう高次脳機能障害」といった歪んだ認知から脱却していくことが求められる。

個人的には、この14年、所属する畿央大学にて、大学院教育を開設・展開することができた。14年前はほとんど一人で調査、実験、執筆、発表などを行っていたが、今は多くの仲間がいる。私の研究室を巣立っていった修士課程の院生は約100名、博士後期課程の院生は約20名になる。そして、常時約20名研究室に院生が在籍している。加えて、共同研究あるいは意見交換する仲間や臨床・研究機関が14年前に比べると圧倒的に増え、リハビリテーション領域にそれは止まっていない。そうした仲間の力のおかげで、国際的に評価される基礎・臨床研究もルーチンに公表することができている。もちろん現状に満足はしていないが、振り返ってみると昔よりも断然今の水準が向上していることは自他共に認めるところである。そのような背景からも、14年前はまだ自分の言葉になっていなかった書物（今だからこそ言える）が、本書は自分の言葉あるいは研究仲間との共同の言葉になっており、力強い。いや、地に足がついた言葉という表現が適しているのかもしれない。そして、この言葉・記述を誰かが引き継ぎ、更新し続けるに違いない。それを今から期待している。

さて、この段階で本書を世に出すことになった。もうしばらく待とうという意識もあった。それは、確固たる共同研究成果を盛り込みたいし、もっと臨床に踏み込んだ内容を提供したいという想いに由来している。しかしながら、そのまま時間だけが経過することで、適切なタイミングを逃すことにもつながるとともに、その段階において、私自身のエネルギーも十分にあるか不明であったため、このタイミングでの出版となった。それについては後悔していないし、まだそういう想いがあるのであれば、本書を10年後ぐらいには改訂できるのではないかと思ったりもしている。その時、私は60歳、キャリアをどう終えるかを思案している時に違いない。そのような成長を自分自身が遠観する意味でも、出版し言葉に残しておくというのは良いのかもしれない。本書に示された現段階での情報が、教育・研究者、そして臨床に携わる専門職の方々に利用され、エンドユーザーである患者や対象者に還元されれば、著者としてはこの上ない報酬である。

本書は、10数年にわたっての下記の仲間との結晶であることは言うまでもない。ここに敬意を表したい（敬称略）。河島則天氏、大松聡子氏、高村優作氏、藤井慎太郎氏、阿部浩明氏、生野公貴氏、田中幸平氏、万治淳史氏（以上、注意・半側空間無視研究グループ）、嶋田総太郎氏、住谷昌彦氏、前田貴記氏、座間拓郎氏、平川善之氏、信迫悟志氏、大住倫弘氏、片山脩氏、今井亮太氏、石垣

## あとがき

智也氏、湖上健氏、西祐樹氏、宮脇裕氏、林田一輝氏（以上、知覚・身体性・失認・失行研究グループ）、河村民平氏、藤田浩之氏、尾川達也氏（言語・ワーキングメモリ・意思決定研究グループ）、以上が本書に直接的に関係する研究内容について情報提供していただいたり、ディスカッションさせていただいたりした仲間である。加えて、この領域の研究を推し進めるにあたって協力をしていただいている株式会社クレアクト、株式会社島津製作所の皆様ならびに、平成26年～30年度科学研究費新学術領域研究「脳内身体表現の変容機構の理解と制御（身体性システム）」にてご指導いただいた諸先生に深謝する。

また、私が主宰する研究室では、本書で取り上げた内容の他に、脳卒中後の運動障害、運動制御・姿勢制御、慢性疼痛などの分野を扱っている。それに携わっている院生ならびに修了生にも感謝申し上げる。加えて、一緒に臨床および臨床研究させていただいている村田病院、西大和リハビリテーション病院、摂南総合病院、近森リハビリテーション病院、岸和田リハビリテーション病院の関係諸氏に深謝する。

そして、畿央大学開学以来の仲間であり、情報を包み隠さず交換しつづけてきた、松尾篤氏、冷水誠氏、前岡浩氏、岡田洋平氏に感謝申し上げます。また、畿央大学にて大学院教育システムを一緒に立ち上げさせていただいた金子章道先生（畿央大学栄誉・名誉教授）にも心から感謝する。加えてこのような本の執筆に注ぐことのできる時間を与えていただいている、冬木正彦先生（畿央大学長）、庄本康治先生（畿央大学健康科学部理学療法学科長）他、理学療法学科の諸先生方に感謝申し上げます。

そして様々な行動を見守り続けてくれている恩師の宮本省三先生（現・高知医療学院長）、故・八木文雄先生（元・高知大学医学部教授）、故・沖田一彦先生（元・県立広島大学教授）に深謝する。私の処女作である『リハビリテーションのための脳・神経科学入門（協同医書出版社、2005）』の執筆を勧めてくれたのが、沖田一彦先生であった。本書は沖田一彦先生に捧げたい。そして、処女作から一貫して私の拙劣な文章を修正・校正いただいている中村三夫氏（協同医書出版社社長）にお礼申し上げます。最後に、私の研究活動を陰ながら見守ってくれた家族に心よりお礼を述べさせていただきたい。

本書が、本書を手にとったいただいた方々の幸せに、ほんの少しでも貢献することができれば、著者としてはこの上ない喜びである。

2020年8月  
森岡 周